

# 社会科

## 1 教科でめざすテスト開発

学力診断テストの開発にあたって、社会科では、次のような基本方針を立てテストの開発を進めた。

(1) 学習指導要領「社会」の内容のほぼ全てにわたって小問を作成する。

それぞれの学年における学習の実現状況を把握するためには、出題範囲にかたよりがあってはならない。また、基礎・基本という観点から、教科書に記述のある項目に関する問題に限定するようにした。

(2) 「社会的事象についての知識・理解」の問題は単発的な出題にならないよう工夫する。

社会科で「知識・理解」を問う問題を作成する場合、それぞれの学習項目になんらかの関連性をもたせて出題しないと、単発的な問題の羅列になるおそれがある。このことを解消するために、問題文を会話形式にすることによって、学習項目間に関連性をもたせるようにした。

(3) 「観察・資料活用の技能・表現」の問題は、資料の読み取りだけにならないようにする。

資料活用能力をペーパーテストでとらえようとする場合、どうしても資料の読み取りを中心とする問題が多くなってしまう。本テストでは、実際の授業での子供たちの活動をイメージし、資料収集・選択、資料提示の表現能力などもとらえられるような作問の工夫をすることにした。

(4) 「社会的な思考・判断」の問題は、多肢選択法を中心とした問題とする。

多肢選択法は、テスト技法として最もよく用いられ、採点の客観性も高い。単なる知識を問うものでなく、思考力や判断力を測定できるよう、選択肢の作り方を工夫するようにした。

以上のような方針に基づき、「知識・理解」、「資料活用」、「思考・判断」の各観点ごとの出題割合を4：3：3とし、全体を通して、基礎的・基本的な問題を約7割、発展的な問題を約3割として構成した。

なお、「社会的事象への関心・意欲・態度」の問題については、質問紙法により学習の傾向性や事象への関心の度合いをとらえ、あわせて、記述法の設問をオープンエンドなものとするにより豊かな発想や学習への意欲をとらえられるようにした。

## 2 要素表に基づく設問項目

設問項目を設定する際に、まず、要素表を作成した。その一例として、小学校5年の「観察・資料活用の技能・表現」の一部を以下に示す。

観点	観察・資料活用の技能・表現
到達目標	地図、年表、統計などの基礎的資料を効果的に活用し、その過程や結果を具体的に表現する。
診断要素	診断内容
日本の農業の現状や特色	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ わが国の主な農産物について、その分布状況や生産高を地図や資料で調べたり、表やグラフで読み取ったり、白地図に整理したりすることができる。</li> <li>○ 稲作の盛んな地域について、地図や統計資料、写真等を用いて、自然や土地利用の特色を調べることができる。</li> <li>○ 野菜づくりが盛んな地域について、気候、地形、その他の地理的な条件とのかかわりがわかる資料を調べ、まとめることができる。</li> </ul>
農業に従事している人々の努力・工夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 稲作農家について、仕事のようすや機械化、労働時間、生産を高める努力や工夫などを適切な資料を収集・選択して調べ、稲作農家の現状をまとめることができる。</li> </ul>